

だんつく (藤江)

「なりをしずめてお聞ききやんれ。森もりも林はやしもうぐい
すのこえ。えんえんえ。

はけどつきせぬにわのちり、これよりかぜに
まかす。るんるんる。

やまがらがさしこのうちにもんどりうつ。

いざやわれらももんどりかえす。

おろちたちが、おどりがみたくば板戸いたどをなさ

れ。板戸いたどの上うえの三拍子さんびょうし。」

これは、藤江神社ふじえじんじやのお祭りまつに奉納ほうのうされるだん

つくの歌うたの一節いっせつです。笛ふえと太鼓たいこに合わせてこの
歌うたが歌うたわれる中なかで、大蛇おろちたちの踊おどりが踊おどられる
のです。

藤江神社ふじえじんじやのお祭りまつは、毎年まいとし十月がつの第二だい日曜日にちようび
に行おこなわれ、この舞楽ぶがくは、拜殿前はいでんまえに作つくられた舞台ぶたい



の上うえで奉納ほうのうされます。恋歌仙こいがせん、膝折ひざおり、隠獅子かくれじしの
 三部ぶから成りな、各部かくぶのはじめに古代面こだいめんをかむつ
 た素盞鳴尊すさのおのみことが出て舞まいます。そこへ竜りゅうの頭かしらに
 似た雌雄めすおすの大蛇おろちの面めんを頭あたまから顔かおにかむつた二
 人の若者わかものが、胸むねにかけた太鼓たいこを鳴ならしながら、
 体からだをくねらせて現あらわれます。そして、素盞鳴尊すさのおのみこと
 と対決たいけつし、大蛇退治おろちたいじのありさまを演えんじます。隠かくれ
 獅子じしの終おわりごろ、六人にんの子供こどもたちが、小型こがたの
 竜りゅうの頭あたまを型かたどった面めんをつけて舞まいに加くわわり、
 八やつ頭がしらの大蛇おろちがくねり舞まう様子ようすを表現ひょうげんします。
 これは、藤江神社ふじえじんじやの祭神さいじん、素盞鳴尊すさのおのみことが八岐大



蛇ろちを退治たいじする神話しんわをもとにしたものです。この

ぶがく ふじえじんじや ほうのう
舞楽を藤江神社で奉納するようになったいわれ
が、次のように伝えられています。

むかしから、横根村の藤井神社の祭礼で、だ
んつくが奉納されていましたが、ある年、村に
わる びょうき りゆうこう
悪い病気が流行したことがありました。

「こりや、だんつくのせいにちがいない。」

「神様は、だんつくがおきらいなんだ。」

むらびと あいだ
村人の間にこういうわさが流れたために、そ
れ以来、だんつくはやめて、面や八つ頭などの
ぶぐ しゃむしょ そうこ しま こ
舞具は、社務所の倉庫に仕舞い込まれ、かわり
りっぱ だし しんちよう ひ まわ
に立派な山車を新調して引き回すことにしま
した。

いっぽう いぜん よこねむら ふじえ うつ
一方、ずっと以前に、横根村から藤江に移り
す ひと ふじえ ふじいだいみょうじん
住んだ人たちが、藤江にも藤井大明神をおまつ
りしていました。その人たちが、藤井神社から
だんつくの道具を譲り受けて、藤江神社で行う
ようになったのが、今のだんつくの始まりだと
いわれていいます。

また、このだんつくに使う八つ頭面の後ろ
に垂れている、髪の毛を型どった麻糸は、蝮除け
のお守りになると言われ、舞が終わると、競つ
てこの麻糸を切り取ってお守りにしたといいま
す。藤江には、平兵衛山など蝮のよく出る山が



あり、村人は、この蝮除けのお守りを持って山
仕事に出かけました。子供たちも、みんなこの

お守りを持っていて、蝮にかまれる子はいなか
ったそうです。それで、この八つ頭面は、何度
も修理したり、作り直したりしてきました。

この藤江神社のだんつくは、雨の降らないと
きに、雨乞いの神事としても行われ、舞いを奉
納すると、必ず雨が降ると言われています。舞
いの終わった後、よく晴れていた空が急に曇っ
て、にわか雨が降り出し、北の空に美しいにじ
まで現れた年もありました。